

## 一人ひとりをいかす「国語通信」

— 級友とのかかわりの中で問題意識を太らせる —

木村 孝太郎\*

### 1. はじめに

国語科学習指導の問題点の1つに、内容的価値追求は深まるが技能的価値の定着が鮮明でないといふことがあげられよう。文学的文章の場合、主題追求が優先され、どこをどのように読むことが主題追求を深めているかという全体を支える部分を考えて表現と向き合った学習がなかなか定着しない。文学作品の読みを拡充する技能や他の作品の読みに生きて働く追求の視点が認識されないもどかしさがある。

次に、一読後や自分なりの読みでわかった、理解できたと安定して、何かが不足している、今現在の読みをもっと広げ深めたいという意識の弱さがある。発問によってはっと気づかされるというよりも、発問の答えをさがすのに精一杯であり、発問の意図を考えることはほとんどない。与えられた課題には鋭く反応するが、一つ一つの課題が結びつかずに単独に存在しているかの感がある。

目的を持った能動的な学習はむずかしい一面を持つ。作品全体を見わたし、部分をおさえて表現を追求することによる新しい発見・読みを深めた満足感・充実感は少ない。一部の優れた読みを共有したという錯覚で学習が終わることも多い。

生徒一人ひとりをいかすとは、一人ひとりに学習が成立することである。そのためには、自分の考えにこだわりながら、自分の視点をいかし追求していくことを保障し、それを援助していくことが不可欠である。学校という集団として学習活動を組織するときも、一人ひとりの考えを拾いながら、他者の考えと比較検討させながら変化させ深めさせていく工夫が必要であり、また、課題も生徒からの必然によって生まれたものであると納得できる形で提示されることが重要である。

その解決の一方策として初発感想による「国語通信」をとりあげた。追求過程では、作業学習を基本にした「国語通信」を実践しているが、今回は、初発感想に焦点づけて一人ひとりを自分の考えにこだわりながら追求にかりたてる導入部分の工夫に限定して述べる。

資料1、2は本校に赴任して最初に担当した三年生の『故郷』（魯迅・竹内好訳）、資料3は1年生の『夕焼け』（吉野弘）の初発感想をもとに作成した「国語通信」である。

### 2. 初発感想の位置づけ

#### (1) 発想・疑問を拾い、いかす

一人ひとりをいかすとは、ささいな発想や疑問であっても、その生徒にとっては有意味のものであり、その意味で発想・疑問としては同一の価値があるととらえる必要がある。

かつて私は生徒全員に疑問カードを作らせ小グループで集約させ、学習課題を設定する方法を数回実践した。効果もあったが時間の制約と価値ある課題づくりの二点の問題点から脱皮することはでき

\* 新潟大学教育学部附属長岡中学校

なかった。そこで得たことは、生徒は問題の質や大きさは問わず、必ずわかったこととわからないことは意識し、決して受け身ではないということと、生徒のとらえの価値づけは指導の領域であるという二点である。

発表は時間の制約と取り上げられず価値づけられないものの存在を覚悟しなければならない。また、発表力のある生徒が優先されがちという問題も残る。なによりも発表は消えていく運命にある。そして、指導上の立場から言えばもっとあとで出してほしいという時期尚早のものもある。

このようなことを考え、初発感想をいかし、発言の苦手な生徒のすぐれた考えを位置づけ、こだわって追求していくに足る問題と賞賛することによって一人ひとりが自分に自信を持ち、級友を新しく認め合い、他に求める学習が期待できる。お互いがお互いを教材を通して知ることが学習を深めることにつながる。

資料1、2で具体例を述べる。

#### ① 驚きと満足を与える工夫

資料の教材は研究会の教材との関係で二学期になって初めて取り上げた小説教材『故郷』である。

感想文を書くことの意義を知らず(十分に生かしてこない教師にも問題はあるが)書くことに抵抗がある。しかし、感想文を書くことが価値あることであり、多様な考えが認められるということを実感させる目的で作成した。また、作品全体の中でどのような位置にあるかを示唆し、関係認識力を鍛える目的を持っている。

留意したこと。

- ㊦自由記述(観点は与えない)、㊧時間の確保(家庭学習にしない)、㊨400字以内(200字以上)、㊩より多くの生徒を。

生徒全員を拾い、いかすことが前提であるから一読の時間と書く時間は十分確保し、家庭学習にはしないことが大切である。また、書くことの習慣化も条件である。(明治図書発行「中学国語5」・『正確に表現する力を育てる作文指導』の章参照)

できるだけ多くの生徒を位置づけることは、生徒指導的配慮からばかりでなく、国語への関心・意欲を高める上で重要であり、この方法の初期の段階では重視すべきことである。資料1にはクラスの全員が位置づけてある。また、発言の少ない生徒やつまずいている生徒は積極的に位置づける気くばりも必要である。

#### ② 追求意欲を持たせる工夫

㊦模範的な反応は載せない。㊧多様な視点を載せる。㊨対立点を浮きぼりにする。㊩相違点に気づかせる。㊫課題が明らかになるように、また、中心課題に収斂するようにする。

資料1は、ストーリーの展開に従って各自の疑問と追求の視点や考えを位置づけたものであり、資料2は㊧・㊨・㊫を整理して作成したものである。この二つのクラスは互いにこの「国語通信」を交流した。

#### (2) 位置づけの観点

すでに(1)の㊧・㊨で述べたことに関連するが、生徒は自分の発想の価値については無自覚でかつ恣意的でもある。級友の発想を知って驚いたり、疑問と結びつけたり、中心課題と結びつけて追求しよ

うという構えや方法についての気づきは弱い。まして、技能としての追求の仕方にまで結びつけてはいない。

そこで、技能の定着、追求の仕方を学ぶ力をめざして、位置づけの柱をおさえておく必要がある。私の場合は、次の三つである。

①主題に対峙する反応、②表現・構成に目を向けた反応、③作者や背景に目を向けた反応。

この三点から初発の感想を整理し、その中で、②を中心に、必要に応じて③を取り入れながら①にむけて集約していく方法を取っている。資料1の「最後の三行を言うために、自分の労苦をひゆなどの表現法を使って一つの例文として書いている」や「帰郷の時感じた不安・絶望などの気持は主題と関係ありそうだ」、また、資料2の「この物語は、人と人との別れというものを小さい頃の思い出をいろいろ取り入れ、クライマックスへ、またこの文章全体をもち上げてくれるのだと思う」や「揚おばさんはなぜ登場してくるのだろうか」を大切な視点として価値づけていくということである。

また、次の観点を持つことが生徒一人ひとりをもとっていく上で大切である。生徒の文学教材に対する思考には一定のパターンが見られるからである。つまりの一典型は、部分を拡大したり、思い込み読みをしたりしがちな生徒にみられる。

そのような生徒をみとるためには、

- ①読み手の好嫌いによる反応（道徳的判断で処理しようとする反応）
- ②部分に対する反応（部分拡大型）
- ③後半と主題を短絡的に結びつける反応
- ④中心に目を向けた反応（教師からみると中心にかかわっているが、本人にはそれが意識されていないことが多い）

などを分類することが必要である。これらの反応を通して一人ひとりの追究のしかたや予測されるつまづきをさぐって生徒を位置づけることである。

このことによって、次のことが明らかになる。

(3) 発想の相・層・質を見きわめ、発想の基をさぐる。

「相・層・質」と書いたが、それぞれの概念が初発の感想で明確に区別されているわけではない。要は、感想を読んで、同じような言葉で記述されていても、実は同じでないということをしっかり認識することである。教師は生徒の発言をいかすと言いながら、「つまり、あなたの言いたいことは〇〇ですね。」と集約しがちであるが、生徒一人の胸のうちには、「まとめるとそうなるのだが、わたしの本当に言いたかったこととは少し違うんだがな」という思いが残るはずだと考えている。

学習とは、集約することも重要だが、ことに初発感想をいかす段階や追求を深める段階では、胸の中に残る「少し違うんだがな」の部分を明らかにしていくことで成立する部分が非常に大きいということである。

小さな違いを捨象して、まとめていくことではない。言葉で表せば同じになるが、実はその中には、いろいろな違いを含む、多様な内容が含まれていることを教師も生徒も自覚する必要がある。

「ちょっと違うんだがな」を大切にしないから、一人ひとりが活動しなくなり、まとめられたことを受容する構えを育てるという悪循環になる。まとめを発言できる生徒が活躍し、そこで一つが完結するから、他の生徒が生きないということにつながる。

「相・層・質」の違いとは、まさに、この「ちょっと違うんだがな」の違いである。教師は、生徒に「ちょっと違う」、その違いを大切にすることが学習であると気づかせなくてはならない。その違いが感覚的・恣意的なものではなく、教材の表現に拠って立つ違いであることにまで追い込んでいかなくてはならない。

一人ひとりに追求活動が保障され、違いを検討することで読みが深まり、表現に目をむける力となる。

資料3『夕焼け』の「国語通信」で説明する。(中段「僕は娘をどう思っていますか。」)

僕は娘をどう思っていますか。  
 かわいいそうだ

○ 全員が、娘をかわいいそうだと書いている。でも、そのところの方には、相当の開きや違いがあるよ。次に例を示すから、よく比べてみよう。

1. 二度も席をゆすってやったのに、まだ、と  
しよりが来るなんて。
2. 席をゆすらない若者とくらべると、いいこ  
とをしたのに、身体をこわばらせて心を痛め  
ているから。
3. 席をゆする・ゆすらないで心を奥めている  
から、席をゆすらないことを思うと、気が気  
でない。ふつうにしていられない人だから。
4. 美しい夕焼けも見ることができなくて、じっと  
うっむいているから
5. 他人のつらさを自分のつらこのように感ずる人  
だから。
6. いつでも、どこでも受験者だから。

とどこに君の目は向いていますか。どこが違うことがわかりますか。比べてみると、読みの深さが違うのです。違いを確認して、読みを深めていこう。

45名全員が、詩の中の一行「可哀想に」反応して、「可哀想・かわいいそう」ととらえているが、その内実は、ただ詩中の言葉「可哀想」をそのまま答えたものから、『6. いつでもどこでも受験者であるから』というとらえまで多様である。(6が教師の意図したねらいにまで考え及んでいるとらえかたは別である。また、5とどれだけの差があるかも明確ではない。しかし、実際には、生徒はこのような表現で書き出しており、教師の意図はこれらを区別することによる学習の質的深まりを期待した。)

明らかに教師は4. 5. 6へと変容することを期待している。6を中核にしたいと考えている。生徒も並列とは考えず、6を最善とするであろうと思われる。生徒の中には、どの分類に入るかわからない生徒もいよう。

このような考えから、生徒氏名は載せずに「どこに君の目は向いているか。どこが違うことがわかるか。違いを確認しよう。」という働きかけをすることによって、二で述べた「発想の位置づけ」を生徒一人ひとりに促した。

一般的には感想に朱筆を入れるところであろうが、自分のとらえを見直し、級友のとらえ・視点との違いを吟味しながら、その違いの生ずる理由を追求させる起爆剤として位置づけたのである。

「可哀想」のとらえの「質」的な違いに目を向けたのである。

「可哀想」とまとめてしまえば、話し合いにならないが、「可哀想」の内実の質的相違が話し合いを生む。違いを話し合う中で「可哀想」を読み深めることができる。「可哀想」という共通のテーブ

ルで、質的な違いが学習活動を促す。共通のテーブルがなければ話し合いは一方通行となり、互いに交わらない。

また、この「国語通信」には載せてないが、「三人目にも席をゆずるべきだ」、「なぜ、他人、若者は席をゆずらないのか」という感想が必ずある。これらは、詩を別の面から見ているので「相」の違いとも言うべきものである。

「発想の基をさぐる」とは、生徒一人ひとりの感想の拠って立つところを見据えることである。「可哀想」の質的な違いの生じた読み手の目のつけどころをさぐることである。『夕焼け』の前半の「僕を見た娘の動作」に目を向けてとらえているのか、後半の「僕の考え」に目を向けているのか一人ひとりの目の向けどころをおさえることである。また、P97の①～④をみとって、予想されるつまずき克服の手を構想することでもある。

### 3. 級友とのかかわりの中で

副題に言う「級友とのかかわりの中で問題意識を太らせる」とは、だれが何を考え、どこに目を向けているかわからない状況の中で学習が進められるのではなく、隣のA君は、また、Bさんはここに目を向けているのかとか、彼はこんなことを考えていたのかなどがわかり合っている、オープンにされた中で学習が進められるということが基本になければならない。

資料1、2、3に共通していることは、初発感想ではあるが、ある問題についての答えや模範例を載せているのではない。あくまで疑問や視点、ヒントを載せることに心がけている。

資料2「非常に多くの人がここに注目している。～それでは、これらの生徒は、ここでどんなことを感じとっているのだろう。」や「これは追求のしがいがありそうだ」という言葉によって、ここに位置づけられた級友はどんなことを考えたり、読みとったりしているのかという興味や追求意欲を持たせる工夫である。

資料3で言えば、「この疑問は非常によいところに目を向けています」、「この疑問に次の人たちはすばらしい考え方やとらえ方をしています。そこになったら、ヒントを発表してほしい。答えではないよ。ヒントだよ。」、「さあ、池上、村井はすばらしいことのヒントを投げかけている」と書いた。

このことが他とのかかわりを育てるスタートである。自分の考えにこだわらせ、他と比較してみようとする意識を育てることにつながっている。

他の人がわたしの考えを聞きたがっているという雰囲気の中で「わかりません・考え中です」ということはありえない。「国語通信」に位置づけられ、価値づけられたことを発表するのである。発言をものおじる生徒にも安心して発言できる状況が生まれるのである。

学習集団の中で存在感の薄れがちな生徒がどのような考えやヒントを与えてくれるか、関心を持たれるのである。

自分の考えを吟味するだけでなく、自分の考えを深めてくれそうな考えと結びつけたり自分と異なるとらえと比較して検討していく構えをつけることが、級友とのかかわりの中で問題意識を太らせることにつながっている。

### 4. おわりに — 問題点と展開段階への活用にあたって —

発想を位置づけ、発想の基をさぐることを基本に初発感想の「国語通信」を発行したことが、①多

様な視点から感想が書けるようになった。②疑問を疑問として素直に、恥かしがらずに表出できるようになった（最初の頃見られた辞書的意味の疑問は少なくなり、少しでも追求価値のありそうな疑問を意識しだしてくる）。③多様な視点の中でも、表現構成に目を向ける構えが育っている。などが成果である。

問題としては、①数時間に及ぶ指導時間のところどころに有効に使ってほしいのに、意識の持続がなされない（ノートにはらせて見返しやすいうようにしているが、この問題には、Aさんがいいヒントを持っていたようだよと指摘されてあわてて通信を見返す姿がまだ多い）。②かかわりということでは、発行した時点での興味は高まるが、問題意識の持続にまでは結びついていない、などが残る。

このことについては、「国語通信」発行の時点で次のようなことを配慮した時間保障が必要と考えている（今までのところ配布して紹介、賞賛することと中心課題を予想させ、設定することに主な活用があったが）。

①自分の考えが変わったり、深まったりしそうなことをメモしておく。②他人に聞いてみたいことを整理しておく。などである。

導入段階での初発感想「国語通信」が意識づけ・意欲づけだけで終わらず、展開段階にも活かせるようにするには、生徒が、「○○君の考えや見方がヒントになって……」とか「○○君と△△さんの違いを見て、こんなふうに考えてみた」などの読み深めを育てていくことが重要であると考えている。このことがまたかかわりを深めることにつながると思う。

初発感想の「国語通信」は、その教材読み深める鍵がちりばめられているキーボックスであると考えている。そのような「国語通信」にするためにも、発想の相、質を見きわめ、発想の基を見据えていきたい。

生徒の感想を読んで、分類し、「国語通信」を書くことは時間が必要である。しかし、位置づけられた生徒の喜ぶ顔を見ると、一人でも多くその喜ぶ顔から国語好きの生徒、多様な視点から追求できる生徒を育てたいと思う。

発展段階における「国語通信」、作業プリントを活用した全体と結びつけた部分精読の「国語通信」に言及できなかった。（これらについては、附属長岡校園教育誌「教育論究」第26号・明治図書「中学国語5」『正確に表現する作文指導』（1984）を参照してほしい）。

実践中の一部であるが、ご指導いただければ幸いである。

国語通信 故郷(一) 三

学習課題の位置づけ

疑問 主題は何か。 斎藤

課題

方法・考え

帰郷の時感じた不安・抱望などの気持ちには主題と関係があまりない。 小川

わたしの気持ちの変化と人物の言動と結びつけて読んでほしい。 近藤 大橋 田中 津森 結城 山田 小川 米田 佐藤(博) 野村(武) 塚

魯迅から見た故郷の変ぼうぶり。人物が変わった様子などを自分の心情にからめて描き出しているの。作者の驚き・悲しみを 昔と文と比 べて考えてほしい。 國 松

鈴木(博) 阿部 品田 佐藤(博)

「故郷」のことで何を言いたいのか。 結城 米田 渡辺(博)

最後の三行を言うために 自分の労苦をいかにどの表現法を使って いつの田文 として書いている。 関

石沢

再会  
楊樹(さん)  
閑工  
だんな様  
厚い壁

30年ぶりに会った人々を見て何を思ったのか。 変化の原因を知りたい。 阿部 荒川 山田 広井 池山

30年という年月が変えたのか。年月のせいだけなのか。 石沢 時とともに変わってゆく 広井

わたしと閑工の関係が知りたい。 閑工の変化を見てどう思ったか。 田中 渡辺(博) 佐藤(博) 小林(清) 吉川 鈴木(義)

時代の状況、背景を調べる。 大星 不村(通) 塚 社会の矛盾 池山

なぜ「だんな様…」と言ったのか。 山田 どんな気持ちだったのか。 不村(博) 高野 小川 厚い壁とはどんなことか。 深井 山川

「厚い壁」を隔てて持てる魯迅と故郷の人々の心境 高野

金持ちはなった魯迅 高野 男分が高くなって。 深井

宏児が水空に「家に来い」といわれたときどんな気持ちだったろう。 阿部

→なぜ厚い壁ができたのか、それは最後とつながっているような気がする。 西脇

→何が、彼と人々の間に壁を作らせたのか調べればこの小説はわかってくると思う。 近藤

希望とは何か。 高橋 なぜ 希望という考えが湧かんのか 渡辺(美)

希望

現在の魯迅と閑工の関係をくりかえしたくない。自分たちとちがう新しい主題、経緯をほしい。 大星

なぜ 名残り情しい気がしないのか。 阿部 山川 何を思って故郷を去ってゆくのか。 吉川 石沢 鈴木(義)

こゝろ。みんなの学習の目的がはっきりしたかな。 右の人々は それを以て 学習の方法で目で考え及んでいる。 疑問・課題は、解決方法まで考えたとき、半分解決できたようなものだ。 →どこに、解決の手さかりがあるか。

国語通信「故郷」(一) 木村龍行

学習課題を求めて 感想から

① だいたい二十五がりに 故郷は帰ってきてみると、切  
い境、閑工と遊んだことを思い出して、そして、昔のイメ  
ージがよみがえった時に

② さんごんいじめつけられ、やつれた体で、だんな様……  
とさたら、幼い頃の思い出は、全く遠くわけです。思  
くなく、かしいとは思って、でも声がかつる足らぬと感  
う。

③ このよゆうな場面で、ショックを受けたい方がおかし  
のであって、わたしは、はものすこく悲しいと思  
う。

④ そして、最後の方になって、宏児と水主とが遊ぶとい  
う、切い境、閑工と遊んだのと同じ設定にされるわけが  
宏児と水主は、このよゆう悲劇的な再会にはおなじ  
いように願っているのは、自分の苦い経験からはおなじ  
まえだと思われ、僕も同じだと思  
う。

⑤ この語を眺むと、二十頁と今とが、ちやになつて出  
てくる。

⑥ 五かしの幸福で、だれもがいきいきとしていた頃と、  
今のさびしくらしの中ですつかり変わってしまった人  
間関係がわかるよゆうな気がする。

⑦ わかしは、巨港里小町、とよはれ、人気者だつた楊子  
はごんも、自分の善くばつた善風は対して、いやみをき  
たりする。若しくらしの中では、しよゆうがないのでもし  
れないが、こう目で変わるものかと思  
う。

⑧ 閑工も田畑にくらして、いた頃は、くらしも欲しいし、  
つらいことが重なる、菊つさから態度まですつかり変  
わってしまった。

⑨ 兄弟のようだつた閑工に、だんな様……、呼ばれたの  
はせつなかつたろう。

⑩ 子ども達に、「希望」をたくすのも無理ないと思  
う。

① この物語は、人と人との別れというものを、小こい頃の  
思い出で、いろいろ取り入れ、フライマックスへ、ま  
たこの文章全体をより上げていく、くれるのだから、ま  
たこの文章全体をより上げていく、くれるのだから、ま

② この文章は、人の気持ちを想像してはいない、たく  
さんの比喩を使っている。

③ 四人のすばらしい感情を細にして、君たちのわざして  
いるものを考えてみよう。

④ 閑工の心は神楽の空で……、いいなと思  
う、小林美、閑工も苦  
つて、その人間関係はどうか  
ろう。

⑤ 閑工、だんな様……、  
非常に多くの主役がここに注目している、この感情  
疑問を大切にしよう。

⑥ それでは、これらの主役は、この場面にとんじこを  
感じとっているのだから。

⑦ 「しにりに合いたがって、閑工のほげさう言  
たのだから、  
「しにりに合いたがって、閑工のほげさう言  
たのだから、  
どこにあるかよく見つけたね。

⑧ こういつ所が大切なです。

⑨ 何が閑工を殺したのだから、  
野村徹、林尚子

A 身分の違、からであらう。  
近藤、田崎、江村、中村、加藤、平山

B 貧しい、からであらう。  
増村、早川

これら十分だろうか。

① 閑工もつうかつただろう、心の痛みを感じる。  
増村、山崎、よい視点だ。

② 思い登り？  
菊池、増村、小川

③ 楊おほさん  
なせ登場してくるのだから、  
青木、小黒、上杉

A こまごまなまき方を表している、中村起子  
B 本当にかわいそうな人だ、増村

C 閑工と楊おほさん、二人の変わり方は違つて、伊藤  
行蔵さんのとらえ方は大変重要ではらしい。

④ 宏児と水主  
小林圭、田崎、早川、永沢、滝沢

⑤ 混乱について  
混乱している人が多かつたが、この混が混えなかな。  
三松が描いているように、フライマックスにどのよ  
うに傾いているのだから、これは追求のしがいがあ  
りそう。

⑥ 小黒は、幼い頃の閑工の思い出が長々と出てくるのは  
○○○○○○○○を強烈にするためと正しく言  
っているよ。

⑦ 佐々木、主人公が故郷に滞在した日々を、さきこそ  
「わたし」の気持ちや回想を記して、「よく書  
いてあり、気持ちよくわたりやうい。  
上杉、最後は「希望」と出てくるが、ここまでの  
こととの関連性がわからない。

⑧ 表現について  
鋭い見方をしていた人は、石川の感じを及に  
青木、菊池と出発、提供するよ。

⑨ 小林美、飛人法、比喩  
小黒、コンパスのようない、石像のようない、  
小林圭、状況や場面などか、さうこみしい感じ。

